

明治大正期の本店本館

日本銀行文書局技師

中村茂樹

日本銀行本店の本館建物（以下、「本館」）は、辰野金吾の設計により、明治二十九年（一八九六）二月に建築されました。日本人建築家による最初の国家的建築として日本の建築史を見る上で極めて重要な建物です。昭和四十九年（一九七四）には、国の重要文化財にも指定されました。

上の写真は明治三十八年頃の「本館」の外観写真です。一見今と変わらぬ外観を示していますが、周りに高い建物も無く、手前の外堀通りを往来する荷車と開通間もない路面電車に遠い明治期の姿が感じられます。今回は、建築当初の平面図と写真を基に明治大正期の「本館」の様子をご紹介します。

三つの玄関をもつ「本館」

明治大正期の「本館」には玄関が三カ所ありました（図1）。

まず南側の東西両正門を入ると、建物中央のドーム屋根の下に中庭に面して正面玄関があります。正面玄関を入ると玄関ホール（その形から通称「八角室」と呼んでいます）があり、さらに客溜（注1）につながりました。また中庭に面

して地下の金庫につながる水圧式の荷物用エレベーターがありました。このエレベーターは中庭で荷降ろしされた現金等を地下金庫等に搬送するために使用されていました。現在、この場所は便所に改修されています。中庭に残る馬の水飲み場（写真1）に往時の面影が残っています。

二つ目の玄関は敷地北側の北門（図2）を入れて正面にある北玄関です。主に職員通用口として使用され、入り口を入ると電動の乗用エレベーターと階段がありました。この階段とエレベーターで地下に

降りると地下金庫の出入り口につながり、二、三階の事務室にもつながります。なお、このエレベーターは国内では「凌雲閣」（注2）に次ぐ二番目、事務所ビルとしては最初の設置でした。

三つ目の玄関は外堀通りに面して、建物西側の中央にある西玄関です。この玄関から廊下を東に進むと正面玄関ホールにつながります。ただし、先の二つの玄関と異なり、その用途は現在では不明です。この玄関は道路向かいの常磐橋、さらにはその先の皇居や印刷局と関係があるのかもしれませんが。

この玄関は後の震災復旧時に閉鎖されました。

当時の一階平面でもう一つ紹介したいのは東西対称に配置された四つの階段室です。イギリス製の鉄骨階段で、客船内の階段に似たやや小ぶりの造りできれいな装飾が施されています。その中で東側北寄りの階段だけが現在も残って



写真1 馬の水飲み場



写真2 現存する東側鉄骨階段



写真3 総会室（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）



図1 明治大正期の1階平面

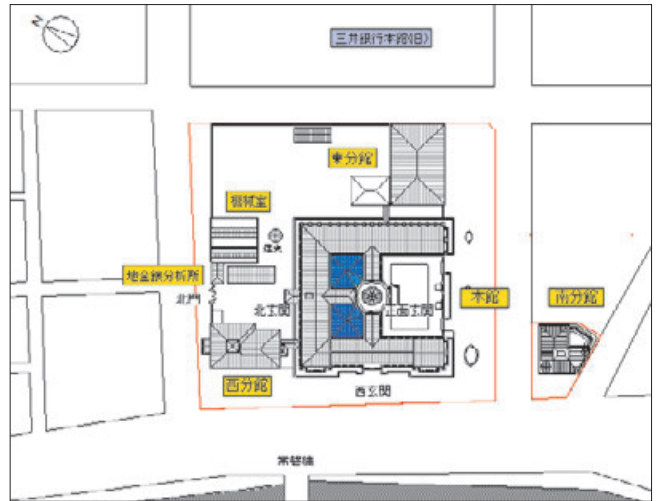


図2 明治大正期の本店（日本橋配置図）（明治40年当時）

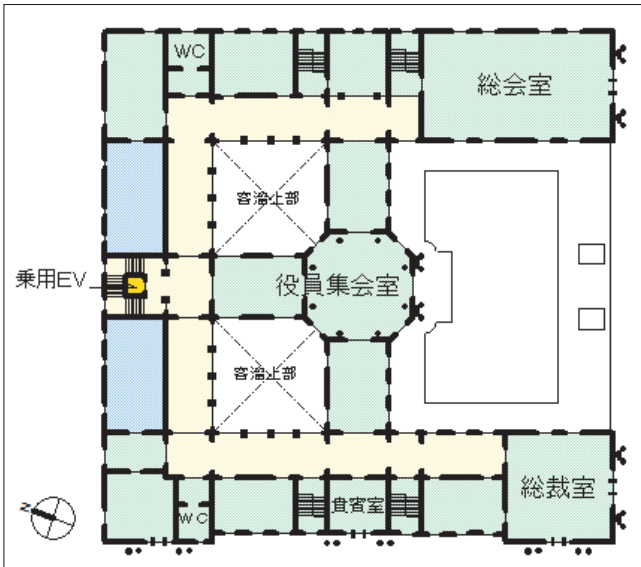


図3 明治大正期の2階平面

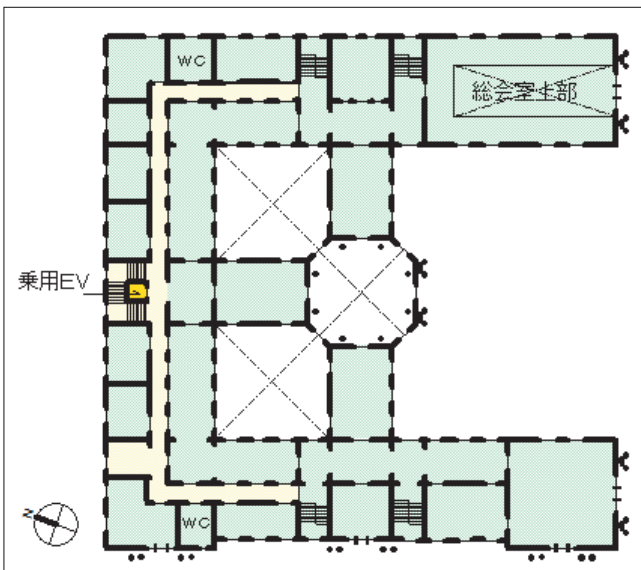


図4 明治大正期の3階平面

「本館」 木板貼り内装の 木板貼り内装の

います（写真2）。「本館」建物が国の重要文化財に指定された際にも、最重要の一つにあげられています。

「本館」の二階は主に役員室が配置されていました（図3）。総裁室は西翼に配置され、ドーム屋根の下は役員用の集会室に利用されました（同部屋は一時期総裁室に使用されたこともあります）。東翼には二層吹き抜きの総会室（写真3）が配置されていました。

同室の三階部分には会場を見下ろす回廊が設けられていました。二階にはほかに貴賓室等の応接室と役員食堂が設けられていました。

三階は一般執務室が配置されていました（図4）。

二階、三階の各室は役員室、応接室をはじめ、それ以外の廊下、一般執務室の床、腰壁、さらに天井にも木板貼りが施されています。現在の漆喰塗りの壁、天井と大理石の巾木は震災後に耐火性を高めるために改修されたも



写真5 金庫回廊の床に残るレール跡(上) / 写真6 金庫壁の通気孔下



写真4 明治大正期の客溜風景

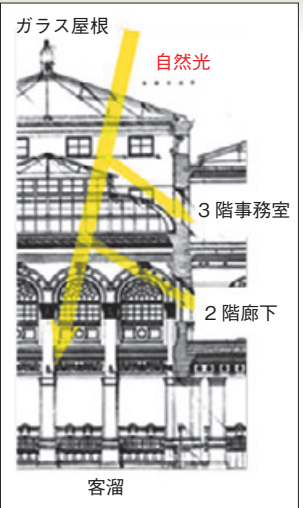


図5 客溜上部のガラス屋根
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵資料を基に著者作成)

ので、当時は石造りの外観とは異質の木造建築的な温かみのある内装でした。

「本館」 ガラス屋根をもつ

今の「本館」の屋根は美しい緑青色のため銅板葺きと思われるているかもしれませんが、今も昔も銅板葺き(注3)です。銅板を用いているのはドーム屋根と軒回りの金物のみです。今は緑青色の銅板に合わせるため同色の塗装を施していますが、明治期は濃灰色の素地のままです。新築時はまだ飛行機の発明前ですので、明治期の屋根を上空から目視した人は少ないと思います。

上空から見た「本館」屋根は漢字の「円」に見えることで有名ですが、明治期は客溜の上部にあたる屋根はガラス屋根でした。明治期は電灯照明が万能でないこともあり、営業場と二、三階の廊下等に自然光を取り入れる工夫が施されていました(図5)。少し話がそれますが中庭の床にもガラス板がはめ込まれ、地下室への採光が工夫されていました。

写真4を見ると客溜の天井につるされたシャンデリアの上部から自然光が降り注いでいる様子に分かります。当時はシャンデリアの明かりにより、ガラス屋根が「円」の字にはめ込まれた水晶のように光っていたのではないかと思います。

「本館」 地下金庫をもつ

「本館」の地階は、現在では一般公開されて有名になっていますが、広大な金庫室で占められていました。

金庫に運び込まれるお金は中庭から荷物用エレベーターで地下の荷捌所に降ろし、回廊を通り各金庫室に運び込まれました(図6)。今でも、回廊の床にはその当時に利用された運搬用トラックの軌道レールの跡が残っています(写真5)。

今では地下金庫は珍しくありませんが、明治期では技術的な課題が多く、日本銀行でも「本館」以外の採用は、昭和七年の一号館増築までありません。

地下金庫の課題は湿気対策と防盜対策です。湿気対策として、①機械室から乾燥した空気を回廊に送風し、②金庫室の壁に設けたハチの巣状の小孔から庫内に給気し、③床に設けた排気孔から床下を通って機械室に排気する、という設備を設けています(写真6)。また金庫壁には吸湿を防ぐために白色釉薬レンガ(注4)を用い、床面には湧水を防ぐためにアスファルトを塗布しています。

防盜対策として、土中からの侵入を防ぐため建物の外周にドレイエリア(注5)を設けています。警備の巡回だけでなく、非常時には日本橋川の水を引き込んで金庫室全体を冠水させる目的もあつたといわれています。換気用に設けた金庫壁の小孔は金庫室への通水孔も兼ねていました。

ドレイエリアは地下室への自然採光にも有効なため、地下階の外周部は食堂等の施設が配置されました。

「本館」 先駆的設備をもつ

「本館」のもう一つの特徴とし



写真7 明治大正期の執務風景（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

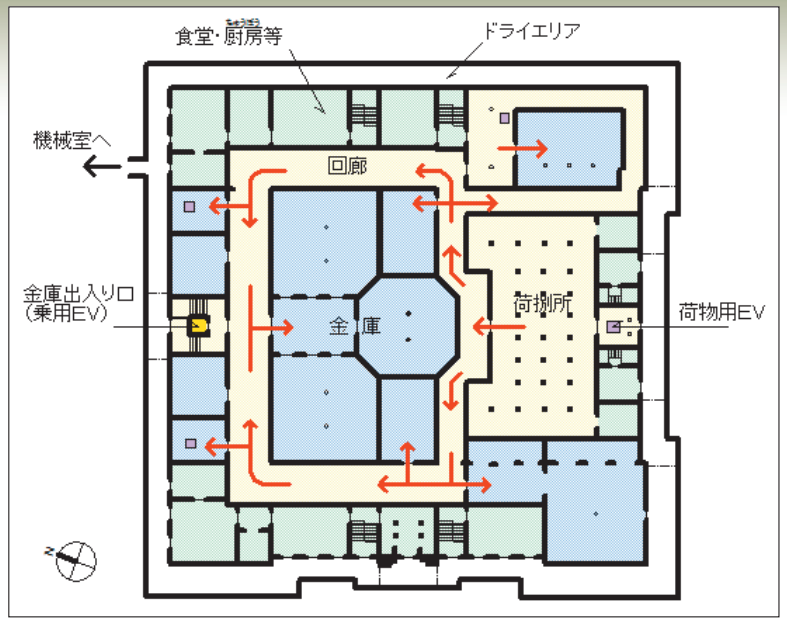


図6 明治大正期の地階平面

て明治二十年代の新築としては極めて先駆的な設備があげられます。

先に紹介した電動の乗用エレベーターもその一つです。電動エレベーター（注6）が開発されたのが明治二十二年（二八八九）です。開発された年に「本館」設計で取り入れたことになりました。もともと速度は三〇m/分（現在の新館は一五〇m/分）とゆっくりしたものでした。

執務室の電灯照明も先駆的です。電力供給事業が始まったばかりのため、当初は機械室に設置した自家発電機から自前で供給していました。電灯は露出配線をクモの巣のように引きまわし、天井から長いコードでつるされたものでした（写真7）。

水洗便所の設置も先駆的です。もともと明治期中頃までは、使用される水が江戸時代と変わらぬ神田上水であり、さらに水洗便所の汚水はいったん集めた後、日本橋川を舟で搬出していました。最新設備と時代のギャップの一例です。余談ながら、当時の「本館」には男子便所しかありません

した。明治三十一年に女子職員が採用された時、「本館」から外の公衆便所に通う女性の姿が、「日本銀行便所道の行列」なる珍風景として新聞で紹介されるほどでした（注7）。

窓シャッターの設置も極めて早く、英国から輸入したもので国内では最初ともいわれています（注8）。

東分館と地金銀分析所の増築

「本館」新築に前後して建築された西分館と南分館に続いて、明治三十四年に東分館が建設されました。文書局事務室、宿直室等に利用され、大正期には二階の一部が金庫に改装されています。これまでの本店建築群を設計した辰野金吾に代わり、辰野の高弟で日銀技師長の長野宇平治の本店最初の設計によるレンガ造り二階建ての建物です。その後、長野は本店および支店建物に最も影響を与える建築家となっています。

さらに明治四十年、機械室の西側にスレート葺き平屋建て四〇坪の地金銀分析所が建設されました。

それ以前、地金銀の溶解分析を必要とする場合には、東京造幣支局に試験分析を依頼していました。同支局が同年廃止されたため本行内に分析所を設けたものです。

大正期の後半に入ると、業務の拡大に伴いしばらく無かった分館増築の必要が出てきました。

大正八年（一九一九）に着工した北分館は大正十二年九月の完成を迎えようとしていました。

そして九月一日を迎えます。

次回は、関東大震災を受けた「本館」の被災と復興の様子を紹介していきます。

（注1）営業場の窓口に面する客用広間。営業場口ビレー。

（注2）浅車にあったレンガ造り、二階建ての展望塔。明治二十三年建築時に設置されたエレベーターは故障が頻発し翌年使用中止。関東大震災で崩壊。

（注3）屋根葺き材として、耐久性を高めるために亜鉛メッキ処理した銅板（トタン板ともいう）が用いられた。

（注4）薄褐色粘土の表面に白色釉薬を塗った後焼成したレンガ。非吸水性に優れ、庫内を明るくする利点もある。

（注5）採光、換気、防湿などのために地下外壁に沿って設けられる空堀。

（注6）米国でのビル高層化のニーズに合わせて、米オーチス社が一八八九年に開発。

（注7）明治三十一年からの女子職員採用のため、同年急遽（きゅうきょ）「本館」の東側に木造平屋建ての女子用食堂と女子便所を建築した。

（注8）英国のクラーク・バンネット社製。当時の新聞に「此窓蓋と云へるは鎧の袖の如く伸縮自在の製造にして窓掛けの如く巻き上げる新發明の品なり」と紹介されている。